

# 第7章

## 日本・サウディアラビア両国関係



皇太子明仁殿下（現天皇）を迎えるファハド皇太子殿下（現国王）（1981年2月、リヤード空港）

## 1 交流の始まりと外交関係の樹立

### (1) 日本人ムスリムによるマッカ巡礼

記録上残っている日本とサウディアラビアとの交流の歴史は、日本人ムスリムによる明治時代末期のマッカ巡礼にさかのぼる。1909年（明治42年）12月、山岡光太郎氏はタートル人ムスリムのアブドッラシード・イブラーヒーム氏の案内で日本人として初めてマッカ巡礼を行った。帰国後、彼は1912年（明治45年）に、「世界の神秘境アラビア縦断記」を、そして1921年（大正10年）に、「回々教の神秘的威力」と題する2冊の著書を出版し、当時の巡礼が死を賭した苦難なものであったことを記述している。



山岡光太郎氏

続いてマッカ巡礼を行ったのは、田中逸平氏である。彼は1924年（大正13年）7月と1933年（昭和8年）3月の2度にわたりマッカに巡礼し、1925年（大正14年）に、「白雲遊記」を著し、巡礼の様様を詳述している。その後、群正三、鈴木剛、細川将、山本太郎、榎本桃太郎の各氏が1935年（昭和10年）から1939年（昭和14年）にかけて巡礼を行っている。鈴木氏は3度の巡礼を果たし、1935年3月の巡礼の際には、マッカのカアバ聖殿の前で発生したアブドルアジーズ国王の暗殺未遂事件を目撃している。同氏は3度目の巡礼の後の昭和14年に、「メッカ巡礼」と題する一書を著し、この暗殺未遂事件の際のアブドルアジーズ国王の沉着冷静な言動を書き残している。



旧東京モスク

### (2) 東京モスクの開堂

1938年5月、イスラームに理解の深い内外の人々の努力により、東京都渋谷区大山町に東京モスクが竣工し、その開堂記念式典が開催された。式典にはイスラーム諸国の外交官が多数列席し、サウディアラビア王国からはハーフィズ・ワハバ駐英公使が政府代表として参列した。これはサウディ政府要人による初の日本訪問であり、同公使は滞日中、日本政府要人と積極的な会談を行っている。

この東京モスクは老朽化のため1983年に閉鎖され、その後1998年1月からトルコ政府の主導による新モスクの建設工事がその跡地で始まった。新モスクは予定通り完成し、2000年6月30日に開堂式が行われた。

### (3) 横山公使のサウディアラビア訪問

1939年3月末、日本政府はハーフィズ・ワハバ公使の訪日に対する返礼と公用を兼ね、エジプト駐在の横山正幸公使をサウディアラビアに派遣し、友好条約問題などの交渉に当たさせた。同公使一行はスエズから乗船し、3月26日にジェッダ港に着き、翌日から車でリヤードに向かい、約1,100キロメートルの砂漠の道を5日間かけて走破し、無事リヤードに到着した。

4月1日、横山公使はアブドルアジーズ国王に拝謁し、約1時間にわたり会談を行った。その後、同公使はサウディ政府の代表者と外交・経済問題に関



横山公使一行が拝謁した際のアブドルアジーズ国王  
(1939年、リヤードの太陽宮で撮影)

し4月6日まで交渉を継続し、翌7日にリヤードを離れ、エジプトに戻った。

### (4) 外交関係の樹立と大使館の開設

日本とサウディアラビアの外交関係の樹立交渉は、横山公使のリヤード訪問から数カ月後に勃発した第2次世界大戦によって打ち切られ、サウディアラビア

は戦争終結の直前に日本に対し宣戦を布告した。戦争終結後の1951年、サウディアラビアは対日平和条約に調印し、1954年3月13日に同条約を批准した。

1952年12月にエジプトに公使館を開設した日本政府は、1953年からシリア、レバノン、イラク、ヨルダン、サウディアラビアに対し、正式に外交関係の樹立を申し入れていた。シリア、レバノンからは相次いで応諾の返事があったものの、サウディアラビアからは何ら回答がなかった。そこで日本政府は、サウディ政府による上述の対



12階建てのサウディアラビア大使館（東京都港区）

日平和条約の批准を契機として、外交樹立交渉を再開した結果、1955年6月、両国間の外交関係は正式に樹立したのである。

1956年、日本政府は駐エジプト土田豊大使をサウディアラビア王国の兼任公



外務省（リヤード）

使に任命したが、その後1958年1月にサウディ政府が東京に大使館を開設し、アサド・ファキーヒ大使を派遣してきたため、日本政府は土田兼任公使を兼任大使に昇格させた。1960年1月、日本国大使館がジェッダに開設され、田村秀治氏が代理大使に任命された。それ以降今日に至るまで、両国は友好な外交関係を維持してきている。

1984年10月1日、日本国大使館は他諸国の大使館と同様、ジェッダからリヤードに移転し、ジェッダには日本国総領事館が同日付けにて開設された。その後、1985年8月1日に、日本国大使館はリヤードの外交団地区に移転している。

### (5) 外交樹立50周年

2005年6月、日本とサウディアラビア王国は外交樹立50周年を迎える。この節目の年に当り、両国は記念行事の開催を計画している。

2003年5月、小泉首相がサウディアラビアを訪問した際、アブドッラー皇太子とこの記念行事についても話し合った。



小泉首相と会談するファハド国王（2003年5月、ジェッダ）

両国の歴代大使のリストは次表の通りである。

駐日サウディアラビア大使

任 期 期 間	氏 名
1958年 1月28日 ~ 1958年 3月25日	H.E. Mr. Sheikh Assaad Fakah
1958年 3月25日 ~ 1960年12月20日	H.E. Mr. Mohamed Sharara
1960年12月20日 ~ 1963年11月25日	H.E. Mr. Sheikh Ahmed Abdul-Jabbar
1964年 6月11日 ~ 1968年11月18日	H.E. Mr. Sheikh Nasser Al-Manqour
1969年 3月 7日 ~ 1975年 4月11日	H.E. Mr. Aounei Dejany
1976年 6月15日 ~ 1983年 3月16日	H.E. Mr. Zein A. Dabbagh
1983年11月30日 ~ 1996年12月21日	H.E. Mr. Fawzi Shobokshi
1998年 6月19日 ~ 2001年11月18日	H.E. Mr. Mohamed Bashir Ali Kurdi

駐サウディアラビア日本大使

着 任 年 月 日	氏 名
1956年 7月21日	土田 豊 (公使)
1958年 4月 1日	土田 豊 (臨時代理大使)
1958年 5月23日	土田 豊 (特命全権大使)
1960年 1月10日	田村 秀治 (臨時代理大使)
1963年 6月12日	前田 憲作 (特命全権大使、以下同じ)
1966年 3月 7日	山中 俊夫
1968年 6月 5日	田村 秀治
1971年12月12日	高杉 幹二
1974年 7月22日	鈴木 干夫
1977年 6月 3日	大口 信夫
1979年11月 1日	中村 輝彦
1982年 3月30日	武藤 利昭
1984年12月12日	岡崎 久彦
1988年 3月17日	渡辺 幸治
1989年12月26日	恩田 宗
1992年 4月14日	太田 博
1994年 9月10日	丹波 實
1997年 8月 3日	高野 幸二郎
2000年 3月 7日	大島 正太郎
2001年11月28日	阿部 信泰
2003年 6月18日	斎藤 泰雄

## 2 経済技術協力

### (1) 日本企業の石油利権獲得

日本とサウディアラビア間の経済技術協力は、アラビア石油株式会社がサウディアラビアとクウェイト間の中立地帯沖合いの石油開発利権を獲得した1957年12月以来、開始されたと言える。



サウード国王に拝謁する山下太郎氏（1957年、リヤード）

1957年2月、アラビア石油の創設者である山下太郎氏は当時の石橋湛山首相、岸信介外相らの紹介状を持参して、石油利権獲得を目的にサウディアラビアを訪問した。サウディ政府は山下氏の一行を歓待し、親切にもてなした。このような友好的雰囲気の中で交渉が行われた結果、両者は、「正式な利権交渉を6カ月以内に開始する」との合意に達し、日本側の一行は帰国した。

帰国後、山下氏は政財界の全面的な支援を得て、アラビア石油株式会社の発起人総会を7月9日に開催し、同社設立の段取りを整えた後、同月26日、再びサウディアラビアに向け日本を出立した。サウディ政府の交渉相手は地質学者でもあったアブドラー・タリーキ財政経済省石油鉱物資源局長（後の石油大臣）で、彼はサウディアラビア・クウェイト間の中立地帯沖合いが最も有望な地域であると示唆していた。

この当時、サウディアラビアの石油利権を求めていたのは日本だけではなく、欧米の大手石油会社も利権獲得に乗り出していたため、交渉は難航した。しかし、2カ月におよぶ長い交渉の結果、サウディ政府は山下太郎氏との契約の大綱を10月に承認し、12月10日に双方は石油利権協定に正式に調印した。

1958年2月、アラビア石油株式会社が設立され、石坂泰三氏が会長に、山下太郎氏が社長にそれぞれ就任した。同社は引き続きクウェイト政府との利権交渉



カフジ油田の沖合集油施設

に着手し、紆余曲折の末、同年7月にクウェイト政府と利権協定を締結した。こうして日本で初の海外における石油開発事業が始まったのである。

1959年7月、中立地帯沖合いの海上で、試掘井第1号の掘削が開始され、翌1960年1月に同井は油脈に到達、出油に成功した。この油田は、後に石油操業の恒久基地となった地、カフジの名をとって、「カフジ油田」と命名されたが、その後の調査で同油田は莫大な埋蔵量を持つ、世界でも有数の一級油田であることが判明した。

1 本目の井戸で石油を掘り当てるといって、幸運なスタートを切ったアラビア石油はその後、40年間にわたり安定した石油操業を継続したが、2000年2月にサウディアラビア政府との利権協定は終了した。現在、同社はクウェイト政府との新しい契約に基づき、カフジにおいて引き続き石油操業に参画している。アラビア石油の事業成功は、日本とサウディアラビア両国の友好促進ならびに経済技術協力関係発展の礎となり、爾来、同社は両国間の架け橋として多方面における日・サ両国関係強化に多大な貢献を果たしてきている。

## (2) 日本・サウディアラビア経済技術協力協定の締結

アラビア石油を中心として始まった民間ベースの経済交流とともに国家間レベルの経済技術協力関係の確立の必要性が認識され、1960年10月に来日したサウディアラビア政府交通大臣スルターン・ビン・アブドルアジーズ殿下（現第

二副首相兼国防・航空大臣)により日本側との公的な折衝が開始された。同殿下は小坂外相との会談においてサウディアラビアの4事業プロジェクト(電話網、天然ガス利用、鉄鋼開発、漁業)への日本の協力を要請した。日本政府はこれらプロジェクトの調査のため、同国へ専門家チームを派遣するなど、積極的な姿勢で応じたが、残念ながらどのプロジェクトも実現に至らなかった。

1971年1月、海外技術協力事業団の中山素平会長を団長とする大規模なアラビア湾岸経済使節団がサウディアラビアをはじめとする湾岸6カ国を訪問し、日本とサウディアラビア両国間の経済協力の必要性が再認識された。同年5月、サウディアラビアのファイサル国王がアラブ諸国からの最初の国賓として日本を訪問し、天皇陛下をはじめ日本政府首脳との会談の席上、日・サ経済技術協力協定の早期締結を要望した。これに応え日本政府は協定案をまとめサウディ政府に提示し、その後、同協定の締結に向けた閣僚・事務レベルの折衝が続けられた。



日・サ経済技術協力協定調印式でのナーゼル国務相兼企画庁長官と宮沢外相(1975年3月、東京)

こうして、1975年3月1日、日本においてナーゼル国務大臣兼企画庁長官と宮沢外務大臣との間で、「経済及び技術協力に関する日本国政府とサウディアラビア王国政府との間の協定」が正式に締結され、協定実施に関する公文も取り交わされた。同年5月、サウディアラビア政府から日本政府に対し、サウディ国内の承認手続きが完了した旨通告があり、同協定は正式に発効した。協定の要旨は次の通りである。

両国政府は両国間の経済・技術協力の促進に努力する（第1条）。

両国政府は、工業、石油、石油化学などの経済開発分野における合弁事業などの設立により、これらの分野で協力を行う（第2条1項）。

サウディアラビア政府は日本から派遣される専門家およびその家族に対し、免税およびその他便宜供与を行う（第3条）。

サウディアラビア政府は同王国における日本の資本投下を奨励する（第5条）。協定の効果的な実施を目的として、開発事業計画および措置について協議・合意するための、両国政府代表者で構成される「合同委員会」を設置する（第6条）。

### **(3) 日本・サウディアラビア合同委員会**

上述の経済技術協力協定第6条に基づき、第1回日本・サウディアラビア合同委員会が1976年1月にリヤードで開催された。日本側からは河本通産大臣、駐サウディアラビア鈴木日本国大使、サウディ政府からはナーゼル企画大臣、ゴセイビー工業大臣らが出席し、具体的なプロジェクトの推進や日本からの専門家派遣問題などについて意見交換が行われた。その後、合同委員会は定期的で開催されており、第2回は1978年4月（東京）、第3回は1981年6月（リヤード）、第4回は1983年4月（東京）、第5回は1986年4月（リヤード）、第6回は1992年5月（東京）、第7回は1997年12月（リヤード）、そして第8回が2002年6月に東京で開かれた。エネルギー、経済、貿易、技術協力、文化など幅広い分野における両国関係強化について討議が継続されており、具体的な合弁プロジェクトの実現など、目に見える成果が報告されている。現在、日本側は外務大臣と経済産業大臣が、また、サウディ側は経済・企画大臣が各々の政府の代表を務め、会議に出席している。

### **(4) 国際協力事業団・リヤード事務所の設立**

両国間の経済技術協力協定の締結により、日本のサウディアラビアへの技術協力が本格的に開始されることとなった。日本政府は、具体的な協力に関するサウディアラビア政府との交渉や日本人専門家のサウディ派遣、サウディ人研

修員の日本受け入れ準備などを円滑かつ効率的に実施するため、技術協力に関する日本側の担当機関である国際協力事業団（JICA；2003年10月1日から国際協力機構に移行）の現地事務所を設置することを決定し、1976年10月、JICAリヤード事務所を開設した。2002年末現在のJICAによるサウディ派遣日本人専門家数の累計は740人（2002年度19人）、日本受け入れサウディ人研修員数の累計は1,608人（同740人）を数えている。なお、同事務所の名称は1986年に、「JICAサウディアラビア事務所」と改称され、現在に至っている。

### （5）リヤード電子技術学院の開校

1974年6月に締結された「高等教育技術協力協定」に基づき、多くの日本人専門家がJICAからサウディアラビアに派遣され、「リヤード電子技術学院」の設立準備に携わってきた。

日本政府の全面的な支援を受けた「リヤード電子技術学院」はリヤード北部のサラハ・ディーン地区に建設され、1993年9月に開校した。同学院は、研究室、実習室、図書館、体育館、プール、食堂をはじめ、学生・教職員用宿舎や浄水施設までも備えた学園都市となっている。

同学院は教育分野における日本の協力のシンボルとして日・サ両国関係の促進に大きな貢献を果たしてきており、1994年にサウディアラビアを訪問された皇太子徳仁殿下・雅子妃殿下ご夫妻もここを視察されている。



リヤード電子技術学院（リヤード）

その後、同学院は1996年から「リヤード技術短期大学」に昇格し、日本の協力はカリキュラム策定や教材作成面で、2001年3月まで続いた。

また、1997年10月に、「電子技術教育開発センター」設立の構想が新たに浮上り、日本人教育専門家がアドバイザーとして派遣された。このセンターは、サウディアラビアの工業高校教員の電子技術の質の向上を目的としており、設立実現に向けた日本の協力が現在も継続して行われている。

## (6) 日本・サウディアラビアビジネスカウンシル

上述の政府間ベースの合同委員会とは別に、民間レベルでの経済協力の強化・促進を目的として、「日本・サウディアラビア民間合同委員会」が1987年に設置された。同委員会は、「(財)中東協力センター」と「サウディアラビア商工会議所連盟」が事務局となり、1987年に第1回会議を東京で開催し、それ以降両国間で毎年交互に会議を開いてきた。第11回合同委員会での席上、サウディ側から当該合同委員会を「日本・サウディアラビアビジネスカウンシル」へ昇格する案が提起され、その後、双方で協議を重ねた結果、サウディ側の提案通り、当該合同委員会をビジネスカウンシルへ改組することが合意され、1999年11月28日、リヤードにおいて双方の代表者が本件に関する覚書に調印し、同カウンシルは正式に発足した。

2003年1月15日、東京において第4回日本・サウディアラビアビジネスカウンシル合同委員会が開催された。前身の日本・サウディアラビア民間合同委員会から数えて通算15回目となったこの会議には、日本側とサウディ側の双方から、政府関係者をはじめ経済界要人や企業の代表者など、それぞれ90名以上が出席し、これまでの日本開催会議では過去最大の規模となった。日本側の斉藤共同議長とサウディ側のジュレイシー共同議長の下で開催されたこの会議は、開会式、第1セッション（一般経済・貿易）、第2セッション（合弁・投資）、第3セッション（日本企業のビジネスモデルの紹介）と続き、最後に両共同議長によるコミュニケの署名が行われ、閉会した。両国の経済・貿易動向に関する講演、対サウディアラビア合弁・投資事業の状況報告、サウディアラビア国内の投資環境の説明がなされたほか、出席者からも具体的な要望事項や提案が出されるなど、真剣かつ建設的な討議が行われた。

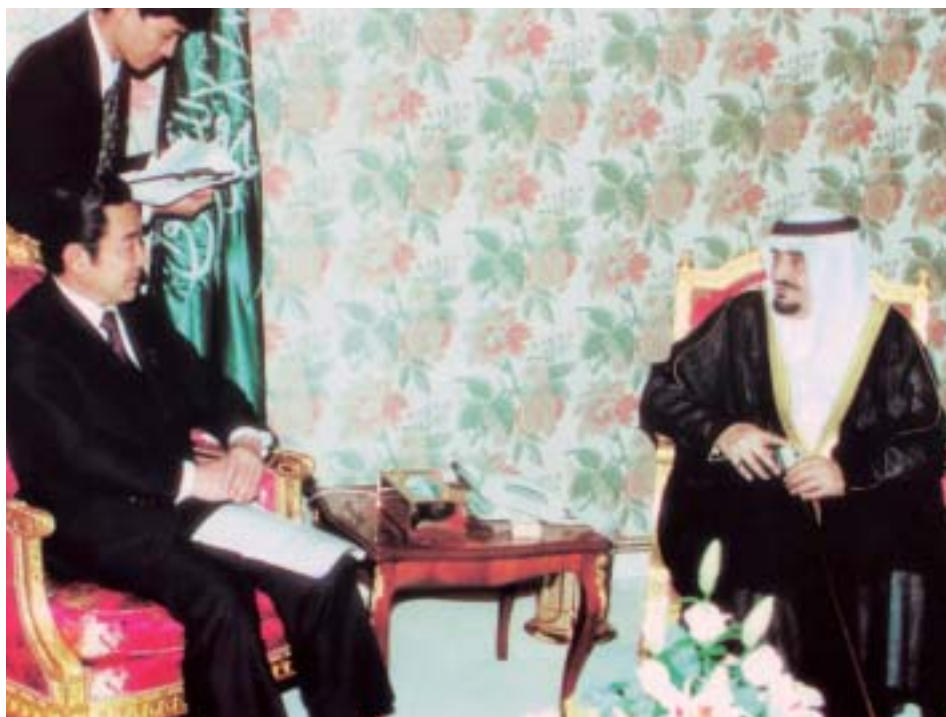


第4回日本・サウジアラビアビジネスカウンシル合同委員会（2003年1月、東京）

## （7）21世紀に向けた包括的パートナーシップ

1997年11月、橋本首相は日・サ関係の促進のため、サウジアラビアを訪問し、ファハド国王、アブドゥラー皇太子をはじめ、サウディ政府要人と会談を行った。国王との会談において橋本首相は、従来の政治、経済分野に、「新分野」を加えた3本の柱からなる多角的な二国間関係の構築を目指す、「21世紀に向けた包括的パートナーシップ」構想を提案し、ファハド国王もこれに全面的な賛意を表明した。そして、このパートナーシップを実現するための協力を、「日本・サウディアラビア協力アジェンダ」と名づけて、その検討作業を推進していくこととなった。

協力の拡充分野として、「人造り（教育・職業訓練）」、「環境」、「医療・科学技術」、「文化・スポーツ」そして「投資・合併」の5分野が決定され、両国の事務当局間でその報告書の作成作業が開始された。こうして両国首脳に提出する報告書、「日本・サウディアラビア協力アジェンダ報告書」が次官レベルで最終的に取り纏められたのである。同報告書には、人造りのためのサウディ人研修員の日本受け入れの拡大や電子技術分野における日本人専門家チームのサウディ派遣、



橋本首相と会談するファハド国王（1997年11月、リヤード）

サウディ青年の日本招聘、また、海洋環境汚染対策のためのアラビア湾環境モニタリング、医療・科学技術分野のサウディ人研修員の受け入れ、定期的文化協議の実施、日本語教育専門家派遣など、多岐にわたる協力項目が盛り込まれている。

#### **（8）日本・サウディアラビア協力アジェンダ報告書など各種協力文書に調印**

1998年10月、アブドッラー皇太子が来日した際、「日本・サウディアラビア協力アジェンダ報告書」、「自動車技術訓練所に関する日本・サウディアラビア協力」、「日本国政府およびサウディアラビア王国政府間青年・スポーツ・文化分野における協力」の各文書が、サウディアラビア政府のサウド外務大臣、ヤマニー工業・電力大臣、アッタール企画大臣、そして日本政府の高村外務大臣、与謝野通商産業大臣によって署名された。この署名により、「21世紀に向けた包括的パートナーシップ」の構築が具体的に始まり、これ以降、両国間の協力関係は着実な進展を見せ、ますます深まっている。



日本・サウジアラビア協力アジェンダ報告書等各文書の調印式。右から与謝野通産相、高村外相、ヤマニー工業・電力相、アッタール企画相（1998年10月、東京）

## （9）自動車技術者研修所の設立

上記の「自動車技術訓練所に関する日本・サウジアラビア協力」に基づき、「自動車技術者研修所」がジェッダに建設され、2003年3月19日に、アブドゥラー皇太子の臨席の下、開所式典が盛大に執り行われた。この研修所は、日本側がJICAと日本自動車工業会、サウディ側が技術教育・職業訓練庁と日本車販売店協会が主体となって実施した官民共同プロジェクトであり、若年層の雇用創出と技術教育を目的としている。現在、200名の研修生が日本人専門家の指導を受け、自動車整備技術などを学んでいる。研修期間は2年間の予定である。

## （10）日本貿易振興会・リヤード事務所の開設

1994年10月、リヤードに日本貿易振興会（2003年10月1日から日本貿易振興機構に移行）の事務所が開設された。開所式にはサウディ政府からアブドゥラーハマー

ン・ザーミル商業次官、日本側から丹波駐サウディアラビア大使、豊島日本貿易振興会会長、小島中東協力センター専務理事など多数の関係者が出席した。

同事務所は、サウディアラビアを中心とした中東産油国における日本企業の投資奨励と投資機会の紹介、投資環境に関する情報の提供など、幅広い業務を行っている。

### (11) サウディアラビア投資促進機構の設立

日本の経済・技術力を高く評価しているサウディアラビア政府は、政府レベルの合同委員会の席上などあらゆる機会を捉え日本に対し、同国への投資を要請している。この要望に応えるため、サウディアラビアへの投資促進と拡大を目的とした「サウディアラビア投資促進機構（OPJI）」が日本の主要民間企業・団体によって1995年5月に設立され、中東協力センター内にその事務局が設置された。同機構は、有望な投資案件の発掘と評価、その紹介と実現に向けた必要資金と税制面の調査、既存および新規合併事業の円滑な遂行のための側面的協力など、対サ投資の拡大に向けた活動を実施している。



サウディ工業製品展示会（東京）

## 日本・サウディアラビア合併事業（製造業）

2004年1月現在

合併会社名	事業内容	操業開始	出資比率
Eastern Petrochemical Co. (SHARQ)	低密度ポリエチレン、エチレングリコールの製造	1985年3月	SABIC 50% サウディ石油化学 50%
Saudi Methanol Co. (AR-RAZI)	化学用メタノールの製造・販売	1983年2月	SABIC 50% 日本サウジメタノール 50%
National Pipe Co. (NPC)	大径溶接鋼管の製造・販売	1980年12月	Teymour Alireza 他 51% 住友金属工業 33% 住友商事 16%
Saudi Factory for Electrical Appliances Co. (SELECT)	小型エアコンの製造・販売	1988年4月	Abbar & Zainy 75% 三菱重工業 20% 茶谷産業 5%
Saudi Arabian -Japanese Pharmaceutical Co. (SAJA)	医薬品の製造・販売	1999年11月	Tamer 51%、三共 15.5%、 山之内 15.5%、JAIDO 15.5%、 その他 2.5%
Saudi Japanese Textile Co.	サウディ民族衣装(トウブ、アバーヤ)用生地製造	2001年6月	Al-Hasa Development Co. 78% 丸紅 19%、 セーレン 2%、 AID-J 1%、
United Ink Production Co.	高級インクの製造	2002年2月	Al-Nimir Chemical 80%、 T&K TOKA 10%、AID-J 10%
Denso Abdul Latif Jameel Co.	カーエアコンの製造	2001年11月	Denso Int'l. Asia PTE. Ltd. (シンガポール) 50% Abdul Latif Jameel Co. 50%
Sun Ace Gulf Ltd.	ポリ塩化ビニール安定剤の製造	2001年4月	Sun Ace Kakoh (Pte) Ltd 49% Advance Marketing Enterprises Co. 51%
The Arabian Company and Sasakura for Water & Power	淡水化、発電プラントの据付、運転、メンテナンス、補修改造	2003年5月	Acwa Power 45%、 ササクラ 27.5% 伊藤忠商事 27.5%
International Methanol Co.(IMC)	メタノール、ブタジオール製造・販売	2004年第3 四半期予定	日本アラビアメタノール 35%、SIPC 65%

(出所：日本貿易振興機構・リヤード事務所)

## (12) 日本・サウジアラビア間の貿易

サウジアラビアにとって日本は輸出入ともに常に第1位が2位を占める重要な貿易相手国となっている。同国は日本から輸送機械（乗用自動車、トラック）をはじめ一般機械、金属、化学品、電化製品、鉄鋼などを輸入し、原油、石油製品、LPGを主に日本に輸出している。

2002年のサウジアラビアの対日貿易額は、輸出額約116億ドル、輸入額は約36億ドルで、日本は輸出入ともに、アメリカに次いで第2位であった。また、日本の総貿易量に占めるサウジアラビアの貿易量は輸入では第8位、輸出では第21位であった。同年、日本がサウジアラビアから輸入した原油量は100.3万バレル/日で日本の原油総輸入量の24.7%、石油製品量は5.8万バレル/日で総輸入量の8.9%、LPGは年間464万トンで総輸入量の33.7%を占めた。



インターネットカフェを兼ねたトヨタ自動車現地販売代理店アブドル・ラティーフ・ジャミールのショールーム（ジェッダ）

## 3 日本・サウジアラビア間の文化・教育・スポーツ交流

既述の貿易実績から見てわかる通り、日本とサウジアラビアは、経済分野においては緊密な協力関係を維持しているが、文化や教育、スポーツの分野における交流はいまだに不十分である。両国国民の相互理解と友好親善促進には

これら分野における交流はきわめて重要である。「日本・サウディアラビア協力アジェンダ」において、「文化・スポーツ」が両国間の新たな協力分野として特定されていることから、この分野での今後の交流の活発化が期待される。両国間の文化・教育・スポーツ交流史の概要は以下の通りである。

## (1) 文化交流

サウディアラビア政府、大阪万国博覧会に参加



大阪万博サウディアラビア館（1970年）

1970年3月から9月までの半年間にわたり、万国博覧会が大阪で開催された。サウディアラビア政府はモスクを模したパビリオンを建設し、クルアーンやアラブ・イスラーム情緒に溢れる民芸品などを展示した。同年6月には万博サウディアラビア・デーが会場で開催され、アービド・シェイク商工大臣が出席した。万国博開催期間中、多くの入場者が同パビリオンを訪れ、アラブの世界をほとんど知らなかった当時の日本人にサウディアラビア王国の存在を印象付けた。

湾岸協力会議（GCC）青年文化フェスティバル

1985年9月19日から1週間、東京において「GCC青年文化フェスティバル」が開催され、GCC加盟6カ国から約400名の青少年が来日した。このフェスティバルはアラブ文化を外国に紹介する活動の一環としてGCCが企画したもので、伝統的民族舞踊・民謡の上演、絵画・民族衣装・美術工芸品・刀剣などの展示会などが行われた。サウディアラビアからはファイサル・ビン・ファハド青年福祉庁長官を団長とする一行が来日し、同フェスティバルに参加した。

#### サウディアラビア絵画・写真展

1997年1月に荻谷篤思氏の写真展、「サウディアラビア、自然・歴史そして人々」が東京渋谷のドイ・フォト・プラザにて、そして、「宙 - サウディアラビア」と題した木村光宏画伯の絵画展が1999年3月に東京、大阪、京都の高島屋美術画廊にてそれぞれ開催された。木村画伯は同年11月の日展においてもサウディアラビアをモチーフにした「青い空」と題した作品を出品している。また、同じ11月に東京銀座の文藝春秋ギャラリーで開かれた中村百合子画伯の「地球大好き」と題した個展においても、同画伯の作品、「アシールの風景」が展示さ



写真展「サウディアラビア、自然・歴史そして人々」(1997年1月、東京)

れた。

#### サウディ民族舞踊団、日本で初公演

1998年9月、サウディアラビア文化の一つである民族舞踊を紹介する目的で、政府から同国の民族舞踊団が日本に派遣された。舞踊団は在日サウディアラビア王国大使館主催の第66回建国記念祝賀レセプションにてサウディ民族舞踊を披露するとともに、三越日本橋本店屋上ステージにおいても一般公演した。

#### 王立民族舞踊団の来日

2002年6月、日本で開催された2002年FIFAワールドカップに出場したサウディ・ナショナルチームを応援するため、総勢18名からなる「サウディアラビア王立民族舞踊団」が来日し、新宿や渋谷などの都内各地をはじめ、サウディ・チームのキャンプ地となった調布市や府中の東京競馬場、横浜、埼玉など14カ所で民族舞踊を実演した。

#### 日本文化紹介の展示会

国際交流基金や在サウディアラビア日本国大使館の文化事業として、日本建



サウディアラビア王立民族舞踊団（2002年6月、日比谷公園）

築展（1988年）、日本文化展（1990年）、現代写真展「日本」（1993年）、現代日本ポスター展（1993年）、版画展（1995年）、和太鼓公演（1995年）、生け花展（1996年）など、各種の日本文化紹介展示会がサウディアラビア国内において開催されている。

## （2）教育交流

### 日本・サウディアラビア間の留学生

日本からは、1976年に6名の日本人学生がリヤードのキング・サウード大学にサウディアラビア政府の官費留学した。その後、同政府の留学制度により、マディーナのイスラーム大学、マッカのウンム・アルクラール大学、リヤードのイマーム・ムハンマド・ビン・サウード大学にも日本人学生が留学し、イスラームとアラビア語を学んでいる。

一方、サウディアラビアからは、アラビア石油の奨学制度に基づき、1973年から、同社の対サウディアラビア石油利権協定が失効した2000年2月以前まで、累計で149名のサウディ人学生が日本の大学に留学していた。また、サウディアラムコも日本留学制度を1997年度から導入し、毎年数名の学生を日本に送って



キング・サウード大学日本語学科

いる。このほかに、日本政府の奨学制度もあり、これを利用したサウディ人学生が毎年2～3名、日本に留学している。

#### キング・サ우드大学に日本語学科開設

キング・サ우드大学の言語・翻訳研究所（1994年に学部昇格）内に日本語学科を開設するため、1993年から日本人教員1名が国際交流基金から派遣され、1994年度から言語・翻訳学部アジア語科に日本語コースが開講した。毎年約10名の学生が本コースで日本語を勉強している。

#### アラブ イスラーム学院東京分校

1980年、サウディアラビア政府は日本におけるイスラームの布教とアラビア語の普及を目的として、イマーム・ムハンマド・ビン・サ우드・イスラーム大学の分校、「アラブ イスラーム学院」を東京都内に開設した。同大学から数名の教師が日本に派遣され、分校の業務が開始されたが、その後、同校は旧サウディアラビア大使館内に移された。



アラブ イスラーム学院第1回卒業式（2003年5月）



小・中学生にサウディアラビアを紹介（2003年7月、アラブ イスラーム学院）

1996年末、大使館建物の老朽化により同校が閉鎖されたため、サウディアラビア政府は新たな東京分校の建設を決定し、1997年2月から東京都港区元麻布の閑静な一画において校舎ビルの新築工事を開始した。

校舎ビルは2001年に完成し、同年5月7日、新アラブ イスラーム学院の開校式が両国の関係者約150人の出席の下、盛大に開催された。この東京分校はアメリカ、インドネシアなどに続く、世界で6番目のイマーム大学分校である。

同校は現在、アラビア語講座の開講、講演やセミナーの開催など、アラブ・イスラームの理解に資する事業活動を展開している。

### (3) スポーツ交流

#### 柔道の普及

1961年、日本講道館から女川6段、そして翌1962年には平沼5段がサウディアラビアの財閥アリー・レザー族が経営する「フィラーハ学園」にそれぞれ派遣され、同学園において柔道の指南にあたり、成功を収めた。その後、仕事で同国に赴任した日本人有段者たちの指導などにより柔道はサウディ国内に徐々に普及していった。

1986年から約8年間、講道館6段の鳥海又五郎氏が柔道指南のためリヤードに滞在し、サウディ国内各地で多くのサウディ人若者に柔道を基本から教えた。最初の4年間は青年福祉庁との契約に基づくものであり、後半の4年間は日本政府の国際交流基金からの派遣によるものであった。同氏をはじめ他の日本人ボランティア指導者たちの努力の結果、今や柔道はサウディ国軍と警察の正課として取り入れられるほどになるまで、サウディアラビア社会に深く浸透している。

#### 日本から派遣のスポーツ使節団

- ・1986年11月、サウディアラビアをはじめとするGCC諸国に次のグループから構成された日本青年団が訪問した；国会議員団（9名）、サッカー（21名）、バレーボール（12名）、空手（9名）、柔道（5名）、熊本県グループ（14名）。各国においてデモンストレーション、親善試合などが行われた。
- ・1993年2月、柔道、空手、剣道、合気道の専門家総勢32名から構成された日本伝統スポーツ・ミッションがサウディアラビアを含む中東5カ国を訪問し、デモンストレーションと技術指導を行った。
- ・1994年11月、国際交流基金から空手指導専門員が派遣され、サウディ国内の空手チームを2カ月間指導した。
- ・1997年3月、日本柔道連盟の柔道ミッションがリヤードを訪問し、模範演技を披露した。

#### サウディアラビア・スポーツ団の来日

- ・1992年10月、広島で開催されたサッカー・アジアカップ選手権大会にサウディ・ナショナルチームが、スルターン・ビン・ファハド青年福祉庁副長官を団長として参加し、準優勝の好成績を収めた。

・第12回アジア大会が1994年10月2日から16日までの15日間にわたり広島で開催され、アジア42の国・地域から来日した約5,000名の選手が34競技、337種目で力と技を競った。アジア大会出場5回目となるサウディアラビアからは役員58名、選手116名が参加した。選手団は、空手で銀（65kg級）と銅（80kg超級）、テコンドーで銅（フライ級、フェザー級）、射撃で金（クレー・スキート個人）、陸上で銀（3,000メートル障害）、銅（1万メートル）、ボクシングで銀（ヘビー級）、銅（ライト級）のメダルをそれぞれ獲得した。大会を成功に導くため、広島市内にある63の公民館が、参加国・地域を一つ受け持ち、応援に当たる「一館一国・地域応援」活動を行った。サウディアラビアを担当したのは広島市安芸区の中野公民館で、サウディ選手を応援したばかりでなく、選手団と住民との交歓の場を設けるなど市民レベルでの交流活動も活発に行った。同公民館では、このとき築かれたサウディアラビアとの友好関係を継続するため、館内に常設スペースを設け、同国の国旗、サウディ選手団代表から贈られた記念の盾やメダル、民族衣装、ポスター、写真、関係書籍類などを展示している。この日本初の民間レベルでのサウディアラビア資料常設展示室は青年福祉庁からも高い評価を受けている。



サウディアラビア・チームを応援する広島市安芸区中野公民館

- ・1995年11月、サウディ青年卓球チーム、1997年3月、サウディ柔道チーム、1997年12月にはサウディ空手チームが相次いで来日し、日本チームと親善試合を行っている。
- ・2002年6月、日本で開催された「2002年FIFAワールドカップ」に、青年福祉庁副長官でサウディ・サッカー協会の副会長でもあるナッワフ・ビン・ファイサル・ビン・ファハド殿下を団長とするサウディ・ナショナルチームが出場した。残念ながらサウディ・チームは予選で敗退したが、同チームがキャンプ地とした調布市の住民多数が試合会場に足を運び、サウディ国旗を片手に熱い声援を送った。調布市主催の歓迎レセプションや子供たちとの交流など、様々な機会を通じ、サウディ選手団と調布市民との友好の輪が広がり、日・サ両国間の草の根レベルでの相互理解が促進されたことは、ワールドカップがもたらした大きな成果であった。



ワールドカップ2002で来日したサウディアラビア選手団（2002年5月、調布市主催歓迎レセプション）



ワールドカップ2002での対カメルーン戦（2002年6月、埼玉スタジアム）



サウディアラビア・チームを応援する調布市民（2002年6月、埼玉スタジアム）



サウジアラビア・チーム歓迎情報センター（調布市）

## 競馬

1999年、日本とサウディアラビアの長年にわたる友好関係を記念して、サウディアラビアのアブドラー皇太子から日本中央競馬会に「サウディアラビア・ロイヤルカップ」が寄贈され、同年6月12日に東京競馬場において日本初となるサウディ・ロイヤルカップレースが行われた。その後、毎年同レースは開催されており、その優勝馬に与えられるアブドラー皇太子寄贈の優勝カップは、新たなデザインのものが毎年サウディ本国から担当責任者によって日本に持参されている。レースに先立って両国の国歌が演奏される中、両国国旗が掲揚されるが、この光景は両国間の友好親善の絆の深さを両国民の心に刻み込んでいる。

一方、日本中央競馬会もサウディアラビアにおいてジャパン・カップレース（日本・サウディアラビア友好記念杯）を毎年開催することを決定し、2002年に第1回ジャパン・カップレースが首都リヤードの競馬場にて行われた。この相互競馬レースは両国間のスポーツ交流の歴史に新たな1ページを書き加えた。



サウディアラビア・ロイヤルカップレース優勝者（2001年5月、東京競馬場）

#### （4）2005年日本国際博覧会（愛知万博）

日本国際博覧会（略称：愛知万博）が2005年3月25日から9月25日までの185日間にわたり愛知県において開催される。サウディアラビア政府は早くから同万博への参加の意志を日本側に伝えており、2001年8月に公式参加が正式に受理された。

サウディアラビア王国の文化、伝統、宗教などに関する様々な展示品が出展される予定である。

## 4 日本・サウディアラビア両国要人交流

両国間の要人交流は、1970年の大阪万国博覧会や翌1971年のファイサル国王の訪日を契機として次第に活発化したが、特に1973年の第1次石油危機以降、両国要人の相互訪問が相次いでいる。日本皇室とサウード王家による、1970年以降の特筆すべき要人交流は次の通りである。

#### （1）ファイサル国王の訪日（1971年5月）

1971年5月20日午後1時30分、サウディアラビア政府の特別機が羽田空港に到着し、ファイサル国王が機内から日本の地に降り立った。アラブ諸国からは初



昭和天皇とファイサル国王

めてとなる元首の訪日である。天皇陛下が国王を出迎えられ、ついで礼砲が打ち上げられた後、サウディアラビア国歌と君が代が奏せられた。

同日夜、天皇陛下主催の国王歓迎宮中晩餐会が豊明殿で行われ、皇族をはじめ両国政府関係者が出席した。席上、天皇陛下より、国王の訪日を心から歓迎し、国王の訪問が両国間の相互理解と協力関係の一層の強化に役立つものと確

信するとの歓迎の言葉があり、これに対し、ファイサル国王は、歓迎の晩餐会に対する謝意を表明されるとともに、友好国である日本との経済技術協力関係の促進とその関連協定の早期締結の必要性に言及し、サウディアラビアの経済発展における日本の協力を要請された。

ファイサル国王は、佐藤総理、植村経団連会長、永野日商会頭など日本の政財界首脳との会談をはじめ、東京モスクでの礼拝、ソニー品川工場と石川島播磨重工業横浜工場の視察など、精力的に滞日スケジュールを消化された後、5月25日午前9時、羽田空港で天皇陛下のお見送りを受け、予定通り離日された。

## (2) 皇太子明仁殿下（現天皇陛下）ご夫妻のサウディアラビア訪問（1981年2月）



ハーリド国王から鷹の調教について説明を受ける皇太子明仁殿下（リヤード北部砂漠）

1981年2月28日、皇太子明仁殿下（現天皇陛下）ご夫妻の特別機がリヤード国際空港に到着した。日本の皇室として初めてのサウディアラビア王国公式訪問であり、1971年のファイサル国王の日本訪問以来、日本の皇室やサウード家をはじめ、多くの関係者がその実現を久しく待ち望んでいたものであった。

滞在期間が実質2日間と極めて短かったものの、皇太子殿下はハーリド国王、ファハド皇太子殿下（現国王）、サウード家のその他主要メンバー、政府要人と歓談される機会を持たれたほか、妃殿下共々、サウディアラビア在留の日本人とも親しく交歓された。訪問当時、ハーリド国王は砂漠に滞在中だったため、皇太子殿下一行は王室が用意した特別機にて国王の滞留地に向かい、砂漠のテントの中の国王を訪問した。国王はご自身自慢の鷹を皇太子殿下に披露したり、オアシスに案内したりと、極めて心のこもったおもてなしで殿下に接せられた。また、ファハド皇太子殿下も、到着初日の夜に晩餐会を主催されたのみならず、2日目のリヤード州知事サルマーン殿下主催の晩餐会にも急遽予定を変更して出席されるなど、意を尽くして皇太子殿下を歓待されたのである。

皇太子殿下ご夫妻のサウディ訪問はこうして成功裏に終わり、日本国皇室とサウード王室の絆を一層深めたのであった。

### （3）皇太子徳仁殿下ご夫妻のサウディアラビア訪問（1994年11月）

上述の皇太子明仁殿下ご夫妻のサウディアラビア訪問から約13年ぶりの1994年、皇太子徳仁殿下ご夫妻が11月6日から9日まで同国を訪問された。日本の皇太子による2度目の訪問であり、サウディアラビア政府は国を挙げて皇太子殿下ご夫妻を歓迎した。ファハド国王はナーゼル石油・鉱物資源大臣に接伴を命じて、皇太子殿下ご夫妻をもてなした。

滞在期間中、皇太子殿下は、ファハド国王、アブダッラー皇太子殿下、スルターン第二副首相兼国防・航空大臣、サルマーン・リヤード州知事殿下らと親しくお会いになり、友好を深められた。

ご夫妻はリヤードでは、サウード家の旧都ディルイーヤや日本の協力で建設された「リヤード電子技術学院」を訪問されたほか、日本大使公邸において在留邦人とも歓談された。また、首都リヤードから飛行機で東部州に飛び、日本



皇太子徳仁殿下と会談するファハド国王（ヤマーマ宮殿、リヤード）



アブドゥラー皇太子殿下に迎えられ榮譽礼を受ける皇太子殿下（キング・ハーリド国際空港、リヤード）



アブドッラー皇太子殿下（右）とリヤード州知事サルマーン殿下（左）が皇太子殿下ご夫妻をお見送りに（リヤードのキング・ハーリド国際空港）

のアラビア石油の操業現場を視察されている。この時、東部州副知事のサード・ビン・ナーイフ殿下が砂漠に設営したテントに皇太子殿下ご夫妻を招待し、特別の料理を振舞うなど、ご夫妻の接待に意を尽くされた。

皇太子徳仁殿下ご夫妻の訪問は、日・サ両国の友好親善関係をさらに促進・強化した。

#### （４）アブドッラー皇太子殿下の訪日（1998年10月）

サウディアラビア王国皇太子兼副首相兼国家警備隊司令官のアブドッラー・ビン・アブドルアジーズ殿下は、1998年10月21日より23日まで日本を公式訪問された。

空港の送迎には、皇太子徳仁殿下があたられたほか、前年の1997年11月に総理大臣としてサウディアラビアを訪問した、橋本内閣総理大臣外交最高顧問も出迎えた。

アブドッラー皇太子殿下の訪問は、サウディアラビアからの元首級の要人訪日としては1971年のファイサル国王以来のものであり、同国の皇太子殿下として、また、アブドッラー皇太子殿下自身としても、初めての訪日であった。



天皇陛下、アブドゥラー皇太子殿下を歓迎（1998年10月、皇居）



皇太子殿下ご夫妻と談笑するアブドゥラー皇太子殿下と外相サウド殿下



小渕首相と会談するアブドッラー皇太子殿下

アブドッラー皇太子殿下は、天皇陛下、皇太子徳仁殿下とのご会見をはじめ、小渕総理大臣とも会談し、日・サ両国の将来の協力関係につき意見を交換された。小渕総理大臣との会談後、「日本とサウディアラビアとの間の21世紀に向けた協力に関する共同声明」にアブドッラー皇太子殿下と同総理大臣が署名した。

22日夜、アブドッラー皇太子殿下は、在日新サウディアラビア王国大使館の除幕式に臨席され、開館を祝福された。サウディアラビア王国大使館が1958年に日本に開設されて以来、1998年でちょうど40周年になり、その記念すべき年に新大使館が開館したのである。

アブドッラー皇太子殿下の訪日はサウード王室と日本国皇室の絆をさらに深めたばかりではなく、新サウディ大使館の開館ともあいまって、21世紀に向けた包括的パートナーシップ構築の幕開けをも告げたものであった。

#### (5) 要人の相互訪問

2003年10月までの主な訪日、訪サ要人は次表の通りである。



昭和天皇と内相ナーイフ殿下（1987年4月、皇居）



橋本首相と外相サウド殿下（1996年5月、首相官邸）



天皇・皇后両陛下とリヤド州知事サルマーン殿下（1998年4月、皇居）

日本訪問サウディアラビア王国要人

時 期	氏 名・役 職（訪問当時）
1960年10月	スルターン殿下・交通相（現第二副首相兼国防・航空相）
1962年 2月	ヤマーニー石油相
1965年 5月	ヤマーニー石油相
1967年10月	タウフィーク交通相
1967年11月	ミシャーリー農相
1970年 6月	シェイク商工相
1970年 7月	ヤマーニー石油相
1970年 7月	ターヘル・ペトロミン総裁
1971年 5月	ファイサル国王、国王顧問ナッワフ殿下
1972年 2月	ナーゼル国務相・企画庁長官
1972年 5月	サウード殿下・石油次官（現外相、ファイサル元国王四男）
1972年 6月	ムハンマド殿下・農水次官（ファイサル元国王次男）
1973年 2月	ナーゼル国務相・企画庁長官
1974年 1月	ヤマーニー石油相
1974年 2月	ナーゼル国務相・企画庁長官
1974年 7月	サッカーフ外務担当国務相
1975年 3月	ナーゼル国務相・企画庁長官
1975年 3月	ムハンマド殿下（現東部州知事、ファハド国王五男）
1975年 3月	サウード殿下（ファハド国王三男）
1975年 5月	シェイク教育相
1975年11月	ムハンマド殿下・水資源公団総裁（ファイサル元国王次男）
1976年 3月	ナーゼル企画相
1977年 3月	ナーゼル企画相
1977年 8月	ムトイブ殿下・公共事業住宅相
1977年 9月	ナッワフ殿下
1978年 3月	ナーゼル企画相
1979年 3月	ナーゼル企画相
1980年 3月	ナーゼル企画相
1980年 3月	シェイク農水相
1980年12月	バドル港湾公団総裁
1981年 3月	スレイム商業供給相
1981年10月	ターヘル・ペトロミン総裁
1981年11月	ジャザイリー保健相
1981年12月	アンガリー労働相
1982年 1月	ヤマーニー石油相
1982年10月	クライシ・サウディアラビア通貨庁（SAMA）総裁
1983年 1月	アンガリー労働相
1983年 4月	ナーゼル企画相
1985年 5月	ザーミル工業・電力相
1985年 9月	ファイサル殿下・青年福祉庁長官（ファハド国王長男）
1985年10月	サイヤーリー-SAMA総裁

1986年 2月	ヤマーニー石油相
1986年 6月	アハマド殿下・内務副大臣
1986年 8月	ファーイズ労働相
1987年 4月	ナーイフ殿下・内相
1987年 7月	スルターン殿下・宇宙飛行士（サルマーン・リヤード州知事次男）
1987年 9月	ファーイズ労働相
1987年 9月	アブドッラー殿下・ジュベイル/ヤンブー王立委員会事務局長
1989年 2月	ナッワーフ殿下
1989年 6月	ファハド殿下・東部州副知事（サルマーン・リヤード州知事長男）
1990年 1月	ナーゼル石油相兼企画相
1990年 1月	アブドルアジーズ殿下・石油相顧問（現石油次官）
1990年11月	ナッワーフ殿下
1990年12月	ファイサル殿下・青年福祉庁長官
1992年 3月	スレイム商業相
1992年 5月	アッタール企画相
1992年10月	スルターン殿下・青年福祉庁副長官（ファハド国王四男）
1993年 1月	トルキー殿下・中央情報局長官（ファイサル元国王八男）
1993年 3月	シェイク都市村落相
1993年 3月	オベイド キング・アブドルアジーズ大学学長
1994年 5月	ナーゼル石油相
1994年11月	ザームル工業・電力相
1994年12月	バクル キング・ファハド石油鉱物大学学長
1996年 5月	ハーリド殿下（スルターン第二副首相長男）
1996年 5月	サウード殿下・外相
1996年 9月	スルターン殿下（サルマーン・リヤード州知事次男）
1996年11月	ドゥハイル キング・ファハド石油鉱物大学学長
1997年 4月	ラシード教育相
1997年 5月	アッタール企画相
1997年12月	ファハド殿下 国防・航空相補佐
1997年12月	アル・ワリード殿下（ファハド国王の甥）
1998年 3月	アンガリー高等教育相、ファイサル キング・サウード大学学長、マダニー キング・アブドルアジーズ大学学長、ドゥハイル キング・ファハド石油鉱物大学学長
1998年 4月	サルマーン殿下・リヤード州知事
1998年 6月	ビン・ジュベイル諮問評議会議長
1998年10月	アブドッラー皇太子殿下、サウード殿下・外相、アッタール企画相、ナイミー石油相、ヤマーニー工業・電力相
1999年 3月	ファキーフ商業相
2000年 1月	アブドッラー・サウディアラビア総合投資院総裁
2001年12月	ラシード教育相
2002年 6月	ナッワーフ殿下・青年福祉庁副長官（ファハド国王の孫）
2002年 6月	ゴサイビ企画相
2003年 9月	ゴサイビ経済・企画相
2003年 9月	ヤマーニー商業・工業相

サウディアラビア王国訪問日本国要人

時 期	氏 名・役 職（訪問当時）
1965年 5月	岸元総理
1966年 2月	川島自民党副総裁
1968年10月	椎名通産相
1970年 9月	岸元総理
1971年 1月	中山湾岸経済使節団
1973年 4月	中曽根通産相
1973年12月	三木副総理
1974年 1月	小坂元外相
1975年 3月	宮沢外相
1976年 1月	河本通産相
1977年 2月	永野民間経済使節団
1977年12月	民社党エネルギー調査団
1978年 1月	園田外相
1978年 8月	田中自民党石油問題調査会使節団
1978年 9月	福田総理
1979年 7月	江崎通産相
1980年 2月	園田特使
1980年12月	田中通産相
1981年 2月	皇太子殿下・妃殿下（現天皇・皇后両陛下）
1981年 6月	塩川運輸相
1981年 6月	田中通産相
1982年 4月	橋本自民党行財政調査会使節団
1982年 5月	安部通産相
1982年 6月	福田弔問特使
1984年 3月	中山民間経済使節団
1984年 9月	和田石油公団総裁
1985年 7月	安部外相
1986年 1月	藤尾自民党政調会長特使
1986年 4月	渡辺通産相
1987年 3月	経済同友会使節団
1988年12月	経済同友会使節団
1989年 2月	日本・アラブ友好議員連盟使節団
1990年 8月	中山外相
1990年10月	海部総理
1992年 1月	渡部通産相
1992年 1月	小松石油公団総裁
1994年 4月	平岩経団連会長
1994年11月	皇太子殿下・妃殿下
1995年 1月	木部日本・アラブ友好議員連盟会長
1995年 9月	村山総理
1996年 1月	小淵衆議院議員



皇太子殿下ご夫妻に自慢の鷹を披露する東部州知事サウド殿下(1994年11月、サウディアラビア東部州)



村山首相とアブドラー皇太子殿下(1995年9月、ジェッダ)



与謝野通産相とファハド国王(1999年4月、ジェッダ)

1997年 9月	小杉文部相
1997年11月	橋本総理
1997年12月	堀内通産相
1999年 4月	与謝野通産相
2000年 1月	深谷通産相
2000年11月	橋本元総理
2001年 1月	河野外相
2001年 7月	平沼経済産業相
2003年 5月	小泉総理

## 5 日本サウディアラビア協会の活動と日本サウディアラビア友好ファハド基金



日本サウディアラビア協会創立記念式典でスピーチするスルターン殿下（1960年10月）

日本サウディアラビア協会は、日本とサウディアラビア王国の親善関係を深め、文化交流の促進に資することを目的として、1960年10月に設立された任意団体である。アラビア石油の山下太郎社長が発起人となり、日本の企業に参加を呼びかけ、設立が実現したものであり、爾来、今日まで40年以上にわたり、日・サ友好協力関係の発展と相互理解の促進のため、努力を傾注してきている。東京で開催された創立記念式典には交通大臣のスルターン殿下（現第二副首相兼国防・航空相）が出席され、祝辞を述べられた。

協会会員は、サウディアラビア進出企業を中心に、2003年12月末現在、61社を



協会主催歓迎レセプション。右から小長会長、ゴサイビ経済・企画相、ヤマニ商業・工業相、林副会長、ワリー・サウディアラビア臨時代理大使、坂本副会長（2003年9月）

数え、会長は小長啓一アラビア石油株式会社社長、副会長は坂本吉弘同社社長および林昂中東協力センター理事がそれぞれ務めている。また、歴代の駐日サウディアラビア大使が名誉会長に就任しており、事務局はアラビア石油内に設置されている。

主な活動は、協会報の発行、アラブ・イスラーム関連書籍の出版、アラビア語講座の開講、会員・一般に対するサウディアラビア王国とイスラームに関する情報の提供、在日サウディアラビア王国大使館ならびに関係官庁との協力、訪日サウディアラビア王国要人の接遇、などである。日・サ両国の友好親善促進に長きにわたり貢献してきている日本サウディアラビア協会は、国内の関係機関のみならずサウディアラビア政府からも高く評価されている。

1981年12月、協会創立20周年記念式典が東京で開催され、サウディ政府を代表してアンガリー労働大臣（現ファハド国王特別顧問）が出席した。ファハド皇太子（現国王）は20年におよぶ協会の活動を称え、寄付金50万ドルを同大臣に託され、大臣の手から水野会長に手交された。この寄付金と会員企業からの寄付金を



協会創立20周年記念式典で祝辞を述べるアンガリー労働相（1981年12月）

原資として、「日本サウディアラビア友好ファハド基金」が設立された。協会は同基金から資金援助を得て、アラブ・イスラーム関連書籍の出版事業を行い、2003年10月現在までに以下の書籍を出版し、会員企業をはじめ日本国内の主要図書館や教育機関に寄贈している。これらの書籍はいずれもアラブ・イスラームを理解する上で、貴重な文献であるとして内外から高い評価を得ている。

「サヒーフ・ムスリム（1巻～3巻）」邦訳（小笠原良治・飯森嘉助・磯崎定基訳、1987年～1989年発行）

ペルシャ生まれのムスリム（817年～875年）が著した、最も信頼されているハディース集（預言者ムハンマドの言行録を集大成したもの）の一つであり、日本初の邦訳版。ハディースはムスリムにとってはクルアーンに次ぐ重要な本であり、信仰から日常生活の規範にいたるまで、詳述されている。

「預言者の妻たち」（アーイシャ・アブドッラハマーン著、徳増輝子訳、1988年発行）

預言者ムハンマドの人間味あふれる父親としての娘たちへの愛情を中心として描かれた本。1977年に日・サ協会が出版した「預言者の妻たち」の続編である。

「シャリーアによる統治」(イブン・タイミーヤ著、湯川武・中田孝訳、1991年発行)

シリア生まれのイブン・タイミーヤ(1263年~1328年)が、イスラーム法(シャリーア)が順守される、イスラームの根本に立ち戻った社会の再現を説いた本。

「預言者伝」(ムスタファー・スイバーイー著、中田孝訳、1993年発行)

シリア生まれのイスラーム学者、スイバーイー(1915年~1964年)が著作した、権威ある預言者伝のひとつ。

「正統カリフ伝(上・下巻)」(柏原良英・森伸生著、1994年、1996年発行)

預言者ムハンマドの死後、イスラーム共同体(ウンマ)を統治し、イスラームを広め、ウンマを拡大した正統カリフ(後継者)、アブーバクル、ウマル、ウスマーン、アリーの4人の生涯を記した本。

「アブドルアジーズ王の生涯」(上野悌嗣、徳増輝子、日サ協会共著、1999年発行)

サウディアラビア王国の建国の父、アブドルアジーズ国王の波乱に満ちた生涯をその生い立ちから死去に至るまで、詳細に描いた本。

「タフスィール・アル=ジャラーライン(ジャラーラインのクルアーン注釈; 第1巻)」(中田香織訳、中田孝監訳、2002年発行)

カイロ生まれの2人のイスラーム法学者、ジャラール・アル=ディーン・アル=マハッリー(791年~864年)とジャラール・アル=ディーン・アル=スューティー(849年~911年)が著したクルアーンの注釈書を、アラビア語原典から邦訳した日本初のクルアーン注釈書。



日本サウディアラビア協会出版物の一部